
SHOOTING STAR —流れ星—

水月鏡花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H O O T I N G S T A R — 流れ星 —

【Nコード】

N 3 4 5 6 P

【作者名】

水月鏡花

【あらすじ】

遊園地に遊びに来た少年探偵団と阿笠博士。
園遊園地には好きな人と二人で乗ると両思いになれる観覧車があつて・・・

コ哀のささやかなラブストーリー

あの日あなたと見た流れ星

今もまだ覚えてる

願い事は

そう

『ずっと一緒にいられますように』

「おい灰原！早く支度しろーっ！みんな待ってるぞー」

今日は少年探偵団のみんなと遊園地

「うるさいわねー今行くわよ！」

もちろん保護者は阿笠博士

「楽しみだねーっ」

「おう！」

「あそこっでおっきい観覧車があるんですよー！」

みんなすぐくはしゃいでる

「ほれ、早くせんとおいてってしまっぞい」

「あーん博士、待ってよー！」

やれやれ・・・車に乗るのも一苦労だわ・・・

「ねえねえ知ってる？あそこの観覧車ってー好きな人と一緒に乗る

と、両想いになれるらしいよ!」

ふいに吉田さんが話し出す

「そ、それってほんとですか?」

円谷君が熱心に聞き始める

「うん、クラスの子がそういう噂を聞いたんだって!」

「へえーっ」

両想い・・・か・・・

私にだって好きな人くらいいる

でも、彼には蘭さんという幼馴染みがいて、私の想いは届かない・・・

・
少しくらいは気付いてくれてもいいのに・・・

「鈍感男」

小声でつぶやく

「なんかいったか?」

「なんでもないっ!」

「やっと着きましたねえ」

「ねえ早く行こうよ!」

「こ、こら待ちなさい!」

みんな走っていく 残されたのは私と江戸川君だけ

「ほら、オレたちも行こうぜ!」

(ぎゅっ)

手を握られる

「えっ? ちよっ・・・」

そう言いかけたときにはもう走り出していた

一通り遊び回って夜の8時になった

「あっ! お星様だあー」

「ホントですねえ・・・あつそつだ！観覧車に乗りませんか？」
「おう、乗ろうぜ！」

列には博士・小嶋君・吉田さん・円谷君・江戸川君・私の順番で並んだ

観覧車は2人乗りだから、このまま行くと私と江戸川君が一緒になる嬉しいけど、気まずい・・・

「コナン君ちよつと・・・」

「あ？」

円谷君が江戸川君に話しかける

「実は・・・その・・・歩美ちゃんに・・・告白しようと思って・・・」

「何でそれをオレに？」

「歩美ちゃんは、コナン君が好きですから・・・」

「へ？」

「まあ、当たつて碎けるです」

「そんなことないと思うぜ？まあオレも告白するつもりだからな・・・」

「だ、だれにですか？」

「・・・灰原に・・・だから、お前も頑張れよ！」

「そ、そつだつたんですか・・・よかった・・・コナン君も頑張ってくださいね」

「おう！」

「なあーに話してるの？」

「あつ灰原・・・何でもねえよ」

観覧車の順番がまわってくる

「オレは・・・灰原と一緒にだな」

「え、ええ・・・」

ドキドキする

「ほら、乗ろうぜ！」

手を引つ張られる 恥ずかしくて倒れてしまいそう

「星が、キレイだな」

「え、ええ・・・」

本当にキレイ

「なあ灰原・・・」

「なに？」

「オレ、お前のこと好きだ・・・付き合ってくんねーか？」

イキナリだった

どう返事をすればいいのかわからなかった

「ホント？」

「ああ、ホントだよ」

私も江戸川君が好き だから 答えは決まっていた

「私も江戸川君が好き・・・」

「じゃあ」

「うん・・・」

「よかった・・・てつきり断られるかと・・・」

「そんなワケないじゃない」

そんな会話をしていると突然ケータイが鳴り出した

すごくビックリした

ケータイはまだ買ったばかりでメールや電話に慣れていなかった
パカッと開いて画面を確認すると歩美からのメールだった

『さつき光彦君に告白されちゃった！どうすればいいかなあ？』

という恋愛の相談だった

私は

『吉田さんが好きなようにすればいいんじゃない？』

と書いて返信した

すると

『だって、私はコナン君が好きで・・・』

と返ってきた

少し迷ったけど

『迷わず、目の前で起こっている現実だけを見ればおのずと答えは見つかるはずよ』

って送った

『そっかぁ・・・分かった』

「どうしたんだ？」

「ちよつと恋愛相談」

「歩美からだろ？」

江戸川君は全部お見通しといった表情でそう言った

「知ってたの？」

「ああ、光彦から相談受けてたからな・・・」

「そう・・・」

ピリリリリ

ケータイが鳴る

また吉田さんからのメールだった

『OKしちゃったw今まで近くにすぎたから気付かなかっただけで、本当は光彦君が 好きだったみたい・・・』

よかった・・・もし吉田さんが江戸川君のことを諦めてなかったら私はどうなってただろう

『そう、おめでとう』

とだけ書いて送った

「どうだった？」

江戸川君が歩美のメールの内容をきいてきた

「OKしたそうよ」

「だろうな・・・」

「おっ！流れ星だぜ！」

二人の沈黙を断ち切るように流れ星がすうつと流れた

「ほんと・・・流れ星って流れる前に3回願い事を唱えると願いが叶うのよね・・・」

「えっ！そうなのか？じゃあ次流れたらやってみよう」

そう言ってるコナンが無邪気でもとても愛おしく思えた

「なあ灰原、せっかくだから2人で願い事を言おうぜ！」

「うん」

流れ星・・・

「ずっと一緒にいられますように・・・」

3回は言えないけど 私の願い事、叶いますように・・・

あの日あなたと見た流れ星

今もまだ覚えてる

願い事は

そう

『ずっと一緒にいられますように』

（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想やご指摘、お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3456p/>

SHOOTING STAR —流れ星—

2010年12月30日02時52分発行